

めぐり
宿場
BOOK

日光街道



すぎと
と
じゆく
杉戸宿
Sugito-juku
Machiaruki
Pocket book
まち歩きブック



時の流れに

北村 薫

杉

戸の町に生まれ育ち、暮らして来ました。我々の通った杉戸小学校は、今の中央公民館(※)のところにありました。その頃は、講堂で映画会がありました。全校生徒が床に座り、白黒の映画を観たのです。騒ぐ者はいませんでした。お行儀

がよかった——というより、それだけ動く映像に魅力があったのです。まだテレビがなかったからです。昔はお菓子類も少なかった。だから、初めて飲んだコーヒー牛乳が、あっと驚くほどおいしかった。サイダーなど、ひと夏に一回、本当に暑い日にだけ飲めるものでした。

現代は、面白いもの、おいしいものが身の回りに溢れています。かえって、それが「ある」ことの喜びから、どんどん遠ざかっている気がします。

さて、遠ざかる時間を空間の中に残しているもののあることを、この『杉戸宿 まち歩きブック』が教えてくれます。

(※) 中央公民館……令和3年12月閉館

わたしたちは、小学校の社会科見学で、本陣ほんじんに行きました。駕籠かごをみた記憶があります。国語の教師をしていた父に連れられ、芭蕉ばしょうの句碑くひを見に行ったこともありました。

『奥羽一覽道中膝栗毛』が出てくるのにも驚きます。「こんな本があるのだ」と教えられました。幕末の作です。

十返舎一九が「この世をばどりゃお暇にせん香の煙りとともに灰左様なら」と洒落た言葉を残して逝ったのが天保二年。幕末にはいない。いない人に書けるわけがない。どういうマジックによるのか。たとえば、序文で一九のことを「先師」といっている通り、名前を継いだ弟子の作なのですね。こんなところにも、時の流れを感じます。この作で、杉戸の「釘屋くぎや」について教えられると、それが繁盛していた頃、「我々の曾祖父あたりは何をしていたのかなあ」と思わせられます。

杉戸を舞台にした歴史散歩の友として、先生として、まことに嬉しくありがたい一冊です。

平成27年3月寄稿

profile

北村 薫 —— きたむらかおる
杉戸町出身の直木賞作家、杉戸町名誉町民



早稲田大学第一文学部卒。在学中よりミステリー評論などを手掛け、卒業後は高校の国語教師を務めながら『空飛ぶ馬』で作家デビュー。
平成21年、『鷲と雪』で第141回直木賞を受賞。彩の国学術文化功労賞を受賞し、杉戸町名誉町民にも認定された。作中にはしばしば幼少期の想い出と共に杉戸町の情景が記され、多くの町民からも共感を得ている。

杉戸宿 構成図(幕末期)



アイコン

- 蔵・建築物
- 神社
- 寺院
- 史跡
- 芭蕉
- 本陣
- 道標
- たいむ・とりつぶ
- 案内所
- トイレ
- 駐車場

【巻頭】「時の流れに」北村 薫	00
杉戸宿構成図・マップ	02
広重画の浮世絵	05
「宿場」とは	06

横町

渡辺勘左衛門邸	09
宝性院	10
角穀跡／小島定右衛門邸	12

河原組

富士浅間神社	14
芭蕉の句碑	15
蔵島神社／金刀比羅宮／稻荷神社	16
河原組・ぶらす「丸井酒店」	17
たいむ・とりっぷ「街道のまち並み」	17

上町

渡辺金物店跡	19
高札場跡	20
上町・ぶらす「ささらこしたみ」	21

中町

本陣跡／長瀬清兵衛邸	23
脇本陣跡	24
中町・ぶらす「三村や酒店」	24
名主	25
愛宕神社	26
荒神社／大天狗神	27
伊勢長跡／伊勢屋長兵衛邸	28
漢方医・虎屋跡／内山周文邸	30
たいむ・とりっぷ 「旧杉戸駅前通り」／「杉戸駅（現東武動物公園駅）」	31

下町

明治天皇御小休所趾	32
問屋場跡	33
たいむ・とりっぷ「渡勝商店跡」	34
伊奈稻荷神社	34
旅籠屋／釘屋跡	35

新町

神明神社	37
東福寺	38
たいむ・とりっぷ 「大落古利根川」／「古川橋とバス」	39

清地村

豊嶋屋跡／関口式右衛門邸	41
近津神社	42
高札場（復元）	43
伏見屋／伏見屋久五郎邸	44
来迎院	45
たいむ・とりっぷ「流灯まつり」	46

杉戸宿の成り立ち	48
杉戸宿年表／日光街道と御成道	49



【広重画の浮世絵】

埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵

うたがわひろしげ
歌川広重作といわれる日光街道の全ての宿場を描いた浮世絵があります。それに「杉戸」も描かれています。構図は、杉戸宿東側の入り口にある清地村の「弁天池」が中心になっています。

「弁天池」は、1830（文政13）年4月に杉戸宿へ泊まった、江戸後期の蘭学者・画家の渡辺崋山も、絵にしています。2人の高名な絵師が、絵に残したいと感じさせた杉戸／弁天池の景観は、さぞ清らかで印象深いものだったでしょう。

そもそも 「宿場」とは…？

杉戸宿は、江戸幕府が1616（元和2）年に日光街道に設置したといわれる宿場です。日本橋から日光へと向かう間、21ある宿場の第5番目にあたります。

「宿場」は、旅人を泊めたり、休ませる宿のある場所を思い浮かべさせますが、それだけではありません。宿場の最も重要な役割は、「人馬の継ぎ立て」です。人馬によって隣の宿場から運ばれてきた荷物を、次の宿場へ運ぶことを言います。そのために宿場には、「問屋場」という施設が置かれ、そこで一切の継ぎ立て業務を行い、

ました。杉戸宿で常備が義務づけられた運搬をする人足と馬の数は、25人と25疋とされました。利用者が多くその人馬が足りない場合には、近隣の村々が補う助郷というものもありました。

また、宿屋には大名のような有力者が泊まる「本陣」と、その機能を補充する「脇本陣」、一般庶民も泊まる「旅籠屋」がありました。さらに宿場では、町場の出入り口がクランク状に曲がっている場合が多くあります。城下町にもみられるこの町並みは、枡型と呼ばれています。敵の動きを妨げる効果があるといわれ、江戸防衛が意識されていたようです。日光街道の宿場では、北からの脅威が想定されていたのか、北側にそれが多く見られます。



よこまち
横町

かわらぐみ
河原組

江戸の風情を残す

北の玄関口

わたなべかんざえもん
渡辺勘左衛門家（現在九代目）は、杉戸の旧家として一目置かれている存在です。

1722(享保7)年杉戸宿に移り住んで以来、多数の農地を集積し、小作人を多く抱えるとともに、江戸中期以降

は、質屋業を営み、杉戸宿及び近郊の住民へ金銭等の貸し付けを行ってきました。

(※1874[明治7]年頃の「第六区御用留」に質屋を営んでいたと記載されている)

MAP No.

01



わたなべかんざえもんてい

渡辺勘左衛門邸

杉戸を代表する邸宅

Data

※個人宅であり、敷地内と史料は一般公開しておりません

渡辺氏は、「埼玉公論第六号」にある1896(明治29)年の大地主名簿で、県内297人、町域14人のうちの1人として紹介されています。

功績のひとつには、1900(明治33)年の杉戸銀行の設立があげられます。(現：埼玉りそな銀行杉戸支店に位置)また、杉戸尋常小学校、杉戸高等学校設立の際には多額の支援を行うとともに、1923(大正12)年の杉戸農業学校設立時にも、耕地1町8反余を寄贈するなど杉戸の教育界にも大きな貢献をしてきました。

この間、1876(明治9)年には、五代目勘左衛門が第六区杉戸宿副戸長に就任し、その後杉戸消防組組頭を歴任。1929(昭和4)年には、六代目が第10代杉戸町町長、1933(昭和8)年には、七代目が第12代同町長を務めました。同氏は、数代に渡って町の発展に尽力した人物として、人々から賞されています。

渡辺家からは、上町の渡辺金物店(P19参照)や下町の渡勝商店(P34参照)といった家々を輩出しています。



◀ 広大な敷地と邸宅



◀ 整然とした前面の格子



◀ 敷地内に佇む庄巻の蔵造り



◀ 杉戸銀行。現在の埼玉りそな銀行の前身



Data ▶ 杉戸山宝性院不動寺

▶ 杉戸町杉戸 1-5-6

▶ 0480-32-0342

ほうしょういん
宝性院は、杉戸宿とともに長く、暮らしの礎となってきた「まちの寺院」です。法事や法要の他、戸籍の把握や寺子屋教育、旅籠屋の代わりなど重要な役割を多数担ってきました。

お寺は、1560（永禄3）年に、幸手城主一色氏が安産と子供の成長を願い、不動堂を建て安産不動明王を安置したことから始まったといわれています。

1857（安政4）年には成田山と菅谷山の不動明王を勧請し、あわせて3体

がお堂にまつられています。

1616（元和2）年建立の伽藍には本尊・大日如来が祀られています。

境内には建造物や装飾物などが存在感を示し、徳川幕府の高家職を務めていた武田信玄の子孫の武田信之の書いた扁額、足利氏所縁の紋章やお堂を守る獅子の彫刻などがあります。特に石造りの馬頭観音は日光街道で一番大きく、十分な見ごたえを感じます。

また明治期には、郡役所や小学校（杉戸学校）が置かれたこともあります。



お経の一部を象った街道に多くみられる馬頭観音の石塔



武田信之が立ち寄りしたためた価値ある扁額



百獣の王がお堂に。抱える毬は「生命の源」の意



供養の忌日の数、13体の仏様が祀られている



足利氏一門を示す「二つ引」と言われる紋章



明治期の宝性院。自動車もない時代、街道沿いの寺の静けさが伝わってくる



かどこくあと こじまさだえもんてい

角穀跡 / 小島定右衛門邸

ひ
優美な蔵と古民家。心惹かれるたたずまい

Data

※個人宅であり、敷地内
と史料は一般公開をし
ておりません横
町

宿場の特徴のひとつでもある町端の「ますがた枅型」。その道沿いに堂々たる風格を見せる古民家が「角穀」です。母屋と蔵が並ぶ優美さは、道行く人の心にひとときわ刻み込まれてきたことでしょう。

かつて敷地内には、表の蔵(袖蔵)に続きさらなる他の蔵3つが連なり、敷地を囲む外堀にも収納空間があったといいます。屋内では、大木を使った梁や柱が木材の美しさを際立たせています。また、母屋2階から見はらす

街道のほぼ全景には、**ここからでしか**味わえない爽快感が感じられます。

創業は2代目小島定右衛門によるそうです。屋号は枅形の通りの「角」にある「米穀問屋」を意味しています。日本橋蛸殻町や門前仲町といった場所の4つの商店と情報を共有し、相場の変動にあわせた米取引を行いました。米の輸送する際には、近くを流れる古利根川を利用していたそうです。角穀は、杉戸宿の面影を今に伝える貴重な建物です。



1



2



3



4



5



6



7



8



9

1) 街道沿いの風格ある姿
2) 母屋の内部：表玄関の通用口 3) 当時のまま残る収納兼階段 4) ゆったりとした時が流れる室内 5)・6) 蔵内部の立派な丸材の梁 7) 柔らかな光を放つ蔵の窓 8) 2階格子窓から街道を一望 9) 記帳の「表書き」には2代目小島定右衛門の名

横
町

ふ じ せんげんじんじや

富士浅間神社

伝統の行事「初山参り」はここで

Data ▶ 杉戸町杉戸 4-10



富士浅間神社の大きな塚は訪問者の目を引きます。富士山本宮浅間大社の分霊が祀られています。住民からは「浅間様」の呼び名で親しまれています。



神様の祀られる頂上の碑

富士講の人びとは、連れだって実際に富士山に登ったり、身近にある塚を富士山と見立ててお参りしたりすることで、信仰を深めていました。

ちなみにどの富士塚からも、かつては富士山が見えたそうです。

当地の神社では、毎年7月1日に「初山参り」がとりおこなわれます。塚の上で、1年以内に生まれた新生児が額に朱印を授かります。無病息災と健やかな成長を願う伝統の行事です。

ばしょう く ひ

芭蕉の句碑

俳諧のたしなみが広くみられた杉戸

Data ▶ 杉戸町杉戸 4-10

富士浅間神社の塚のふもとには大きな自然石が埋め込まれています。表面には俳諧と俳号、(右に掲載した松尾芭蕉の一句)が刻まれています。『続猿蓑』に載る連句の、発句です。

ちなみに、俳諧とは「俳諧の連歌」の略で、身近な言葉を自由に使い、複数人で長句(5・7・5)と短句(7・7)を即興で作り、

八九間
空で雨ふる
柳哉
(芭蕉) はせ越



刻まれた碑が
どこにあるのか
探すもまた良し♪

聞かせ合うものをいいます。芭蕉と杉戸宿の結びつきは残念ながらわからず、碑を建てることになったいきさつは知る由もありません。ただし、いまに遺る俳額や句集には、当時活躍した杉戸の俳人の名が散見されることから、人びとが盛んに俳諧に興じていたことだけは間違いありません。

いつくしまじんじゃ ことひらぐう いなりじんじゃ

厳島神社/金刀比羅宮/稲荷神社

河畔に集まる寺社が人びとを見守る

Data ▶ 杉戸町杉戸 4-10

江戸時代、このあたりは古利根川舟運の荷揚げ場であり、茶屋や料理屋が軒を並べる活気のあるところでした。

厳島神社には弁財天像が奉安され、「弁天様」と親しまれています。当社は女人守護、技芸上達の神として、働く女性からの信仰を集めています。弁天様のお使いは蛇であるとされ、願かけが叶うと、陶製の蛇や卵が奉納されます。

金刀比羅宮には水上安全、稲荷神社には商売繁盛としての信仰があります。



【厳島神社】弁天様が女衆を護る



【稲荷神社】商売繁盛を願う

♡ 陶元のハート型
がかわいい狛犬

【金刀比羅宮】
水上安全を祈願

扉の見事な彫刻
も必見！



河原組・ぷらす

まるいさけてん
■ 丸井酒店

丸井酒店は、河原町にある酒小売店・立ち呑みバーです。創業者の内山氏は越後から酒造を目的として杉戸に移住をしてきました。それ以降江戸期から昭和初期まで酒造りを続けました。現在は、現代風な店とおもむきある蔵が奥に建ち、歴史の移り変わりを感じさせられます。



奥に移設し、大切に利用されている蔵

Data ▶ 丸井酒店・立ち呑み CLUB HOUSE

▶ 杉戸町杉戸 1-4-8 ▶ 0480-32-0223 ※お店以外、敷地内への立ち入りは出来ません

河原組

た・い・じ とりっぷ

街道のまち並み

昭和期のしもまちからしんまちにかけてのまち並みです。沿路はのんびりとした雰囲気、夏場には商家が縁台を据え、夕涼みを楽しんだといひます。座り話し込む者、将棋に興じる者など、人びとのゆったりとした暮らしの雰囲気が伝わってきます。



現在の埼玉りそな銀行杉戸支店 付近

上町

かみまち

多くの人がびとが行き交った、

高札場のある町場

MAP No.

05



わたなべかなものてんあと

渡辺金物店跡

商家のたたずまいを残す心なごむ古民家

Data

▶ イベント開催時を除き、敷地内と史料は一般公開をしております

渡辺金物店^{かなもの}は、杉戸の歴史を継ぎながら、今も味わいのある店がまえを残しています。

ご親族によると、渡辺金物店は横町の名士・渡辺家（P9 参照）から分家となった先々代が創業したそうです。平成に入り看板を降ろしました。営業当時、お店には格子のついたてに囲まれ主が座るようすが印象的だったとのこと。

現在、屋内では古民家ならではの心なごむ空気が今も感じられ、古き暮らしの風景に思いを馳せることができます。梁・土間・戸棚・古道具の一つひとつが懐ましく、往時の商家の生活感を醸しだしています。

上町



屋号を掲げていた頃の建物正面と歴史を語る板張りの外壁



戸棚の中に並ぶ商いのなごり、時代を物語る広告看板たち





こうさつばあと

高札場跡

幕府の「御触れ」は人びとの集まる場所に

Data ※写真の古民家は現在解体されております
※高札場の復元は 43 ページに掲載



2013(平成25)年撮影

「高札^{こうさつ}」とは、幕府の命令や掟書き^{おきてがき}を知らせるために、木札に書かれたものを意味します。ゆえに「高札場^{こうさつば}」とは、高札を数枚まとめて高く掲げられた場所を表します。

杉戸宿では、幕末には遠野屋^{とんのや}の、元禄期には名主の関根四郎兵衛宅^{げんろく}の敷地の一角に置かれていました。後者の場合は間口が23間半(約42.73m)のうち、高札場は2間半(約4.5m)の幅

をとり、その分免税を受けられました。この地点は、日光街道に杉戸宿と関宿城下町(現千葉県野田市)を結ぶ場所にあたり、人の目に触れやすいことから高札場が設けられたと考えられています。

現在、復元された高札場が街道沿いの「清地村」エリアに設置されています(43ページ記載)。



跡地に建てられた古民家



福井城下の写真

写真は幕末維新期、北陸街道の福井城下九十九橋北詰の高札場である。
福井市春嶽公記念文庫福井市立郷土歴史博物館蔵



このような高札が宿場の中心に掲げられた



史料に載る杉戸宿高札場



高札場建替願書

上町・ぷらす

■ ささらこしたみ

渡辺金物店の外壁は、^{ささらこしたみ} 簾子下見と呼ばれる仕上げ方法です(P18,19)。木材が縦横整然と組み合わせられるさまは美しいものです。そして、簾子(縦の角材)を外せば横板は容易にはがせ、火災時に被害を小さくする、実用的な面も持っています。



Data ※個人宅ですが、公道からの見学は可能です



本陣跡 / 長瀬清兵衛邸

重厚な門がまえが格式の高さを象徴

Data

※個人宅のため敷地内と史料は一般公開しておりません

宿場にある宿のなかで、もっとも重要で格式高かったのが本陣^{ほんじん}です。

現在も残る立派な門を見れば、多くの有力者が駕籠^{かご}を置き、出入りをしていたようすが、思い浮かべられます。

本陣には、大名や幕府役人、日光門主といった特定の身分の高い者が休憩し、休泊しました。玄関と門がまえがあることが、本陣の特徴です。

本陣は、杉戸では主に長瀬家が長く務めていました。同家の当主が女性だった時期には、他の家が務めたこともあ

りました。

今もこの地で暮らす海老原氏のご先祖と考えられる市左衛門^{いちざえもん}が役目を務めたこともあります。

本陣では休泊代ではなく、謝礼として支払いを受けることとなっていました。

1836（天保7）年の例では、休憩^{ひき}200疋（約50,000円）、休泊300疋（約75,000円）でした。

中町

宿場の中心、
格式ある本陣などが
軒を連ねた

なかまち
中町

※本陣跡：公道からの見学のみ可能



門がまえと並ぶ力強い樹勢の松

2014（平成26）年撮影

※現在は寿命により松の木はありません



休泊者名を書いて掲げる宿札^{しゆくぱくだ}



大切に保管される貴重な史料



わきほんじんあと

脇本陣跡

格式を持ち、玄関を設けることが許されていた

さかやでんえもん
(西側) 酒屋伝右衛門 邸跡
つたやきちべえ
(東側) 蔦屋吉兵衛 邸跡

杉戸宿の脇本陣は本陣の両脇に一軒ずつありました。一般の旅人を泊めますが、要職の者が泊まる場合もあり、本陣に準ずる宿でした。一般の旅籠屋との格の違いとして、玄関または門構えを設けることが許されていました。

時代により務める者は変わつたと伝えられ、幕末期は酒屋伝右衛門と蔦屋吉兵衛だったといわれています。

現在、酒屋も蔦屋も残っておらず、子孫も他所に移動して、当時の様子を語り継ぐ者は見当たりません。

なお、前述の酒屋伝右衛門は脇本陣の他に、旅籠組合の総代を勤めたり、蔦屋吉兵衛は、本陣を長瀬家の代わりに勤めたこともあるようです。



◀西側跡
(現在)



▶東側跡
(現在)

中町・ぷらす

みむら さけてん
■ 三村や酒店 跡

宿場通りに並ぶ「三村や酒店」は、江戸期から続いた商店でした。店主によれば、店は150年ほど前に、隣にある清地村から当地へ移転してきたとのこと。改修前の店舗は、写真のような古民家で商家のたたずまいを今に伝えていました。



1989(平成元)年頃

Data ※現在店舗は閉店しています

なぬし

名主

名主の役目は、重要かつ多岐に

下町在居の名主・鈴木小左衛門による水墨画



名主とは、領主の下で村政を担当した村の長です。主に関東での呼び方で、関西では庄屋、東北では肝煎と称しました。役割は多岐にわたり大変忙しいものでした。領主の命令を農民に伝えたり、年貢の割り当て、もめごとを解決することなどです。村の問題は名主が中心となり処理をしました。

また他に、杉戸宿では名主の補佐をする年寄、名主と組頭の村政を監視する百姓代という役もありました。

杉戸宿では、町や組ごとに名主が置かれていたといわれています。1746(延享3)年に全体で10名いたところを4名に減らし、江戸末期まで同人数で役を務めました。名主と問屋は兼帯していたようです(P33 参照)。

杉戸宿は、宿場町であると同時に、「村方」としては、幕府直轄領で代官支配所でした。

あたごじんじゃ

愛宕神社

杉戸宿の鎮守。地域を守護する神社

Data ▶ 杉戸町杉戸 4-4



拝殿脇には、樹齢数百年の大銀杏おおいちよう

愛宕神社は杉戸宿の鎮守の1つです。大火の経験のある杉戸では、火伏せの神としても深く信仰されています。古くからの言い伝えで、愛宕神社の成り立ちは1705（宝永2）年までさかのぼります。この年の大水の際、愛宕様の像が当地にあった香取神社の大銀杏おおいちようの元に流れてきたそうです。この像が合祀され「愛宕香取合社」となりました。そして、明治の初めに社号を「愛宕神社」に改められました。明治政府による神仏分離令までは、宝性

院（P10 参照）が神社の管理をする寺院「別当寺」でした。現在境内にある大銀杏の樹勢は、災害の影響もあり良好とはとてもいえません。それでも、地域の人びとに見守られながら徐々に力を戻してきました。この大樹は、前述にある、愛宕様が流れ着いた「大銀杏」であるとの推測があります。300年以上前すでに大銀杏といわれていたのであれば、当然ながら樹齢300歳をはるかに上回ることにあります。

こうじんしゃ

おおてんぐしん

荒神社 / 大天狗神

社殿の縁起書に記された歴史では14世紀にさかのぼる

Data ▶ 杉戸町杉戸 4-4



【荒神社】祭神は三面六臂の三寶神さんめんろくつびさんぼうしん

荒神社は、鎮守・愛宕神社境内の築山から地域を見守っています。神社は氏子である海老原氏が守っており、神社の縁起書が社殿内に納められています。同書では、荒神社は1376（永和2）年に坂東（関東の古称）の武士が、古利根川をさかのぼってきた際に風波が荒んだため、ここに舟を着け、守り本尊を祀ったと伝えられます。1598（慶長3）年に御嶽山が合祀され、大天狗神が建ち、1685（貞享2）年に稲荷神社も合祀されたとされています。



【大天狗神】社殿の中には神社の縁起書が



荒神社の隣には稲荷神社が並ぶ



いせちょうあと いせやちょうべえてい

伊勢長跡 / 伊勢屋長兵衛邸

江戸の造り酒屋の風情を、近年まで伝えていた

Data

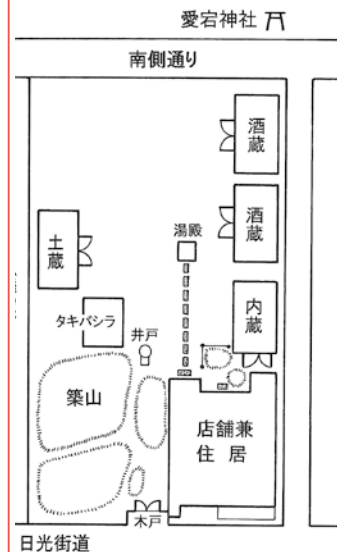
▶小林質店▶杉戸町杉戸 4-3-1

▶0480-33-3000

※写真の古民家は現在解体されております



※ 2011年の東日本大震災の影響で
惜しくも解体された伊勢長跡



家屋と蔵が並び宿場特有の縦長の敷地
(昭和20年初期 当時)



代々伝わる酒造時代の看板と、古道具



店の土間から緑豊かな庭園へ

6 畳間の間口の広さの神棚



駒寄は人馬が入ることを防ぐため 蔵の真っ白な壁。観音扉の重厚感

鎮守・愛宕神社の参道に建つ小林質店は、かつては「伊勢長」と呼ばれる造り酒屋でした。1852（嘉永5）年に建てられた、蔵造りの古民家が江戸のまち並みを近年まで伝えていました。しかし、残念ながら東日本大震災で崩れ、安全確保のため、姿を消しています。表には駒寄という馬を繋ぐための格子囲いがありました。

伊勢長は、初代伊勢屋長兵衛（1783／天明3年没）が酒造を目的に、はるか伊勢の小林村（現三重県伊勢市）

から杉戸の地へ移り住み、創業したと伝えられています。「長兵衛」は代々襲名され、『酒造株高書上帳』（1803／享和3年）といった史料の中に名が記されています。

杜氏は越後杜氏、水は井戸水を使用していました。当家で親族のひとりによれば、伊勢屋の井戸水は良質で、他の酒造店にも分けていたといいます。

酒造店は明治20年代に店を閉じました。その後、杉戸郵便局、小林質店と移り変わり、後継が家を守っています。



かんぼうい とらや あと うちやましゅうぶんてい

漢方医 虎屋 跡 / 内山周文 邸

宿場の名医であり、教養人

とらやせんぞう うちやましゅうぶん
虎屋善蔵（内山周文）は杉戸宿の漢方医のひとりでした。その後を継ぐものも昭和期までを診療医として地域医療を担っていました。屋号「虎屋」は、そのまま薬局に名を伝えています。善蔵には、当時杉戸で流行していた俳諧のたしなみがありました。『多少庵俳壇史』には、善蔵について「内山小袁通称は善蔵杉戸の人なり、有名な小児科の医家にて家号を虎屋」、「医才は神に通じ」、「小児の疳は虎屋の門をくぐれば診を請けおはざるも

全治す」、などと記され杉戸の信頼される医師であったことが分かります。また、善蔵は岩槻藩士・教育者・儒学者である児玉南柯との親交がありました。1796（寛政8）年には、善蔵は南柯を家に招いて講義を受け、以降も親しい付き合いが続きます。1809（文化6）年に起きた、杉戸宿中町から新町にかけての大火の際には、翌日すぐに南柯が杉戸まで見舞いに来ており、2人の親睦の深さを思わせます。

中町



昭和30年の駅前通り。
突き当たりが現とらや薬局。国道へ抜ける道はまだ無い

photo: 高橋写真館提供

TIME TRIP

た=いむ とりつぷ



桜のトンネルとして名所となっていた頃の駅前通り

旧杉戸駅前通り

1899（明治32）年に東武鉄道が開通し、杉戸駅ができました。翌年に、杉戸町から駅までの道路「停車場通り」と橋がつくられました。

通りには桜が植えられ、桜のトンネルとして名所となりました。戦時中に伐採されましたが、美しさは当時を知る人びとから語り継がれています。

杉戸駅
（現東武動物公園駅）

杉戸駅は、現在の東武動物公園駅の前身です。開設時は北千住駅から久喜駅まで鉄道が開通し、その区間に西新井・草加・越谷・粕壁・杉戸の各駅ができました。



しもまち 下町

問屋場が置かれた
宿場の要どころ

MAP No.

12



めいじてんのうごしょうきゅうじょし

明治天皇御小休所趾

問屋場跡には「明治天皇御小休所趾」という石碑を見ることができます。1876（明治9）年に県区務所が置かれており、当時陛下が、東北巡幸に際しここで休憩をとったことを記す碑です。

Data

- ▶ 杉戸町杉戸 2-13-12
- ▶ 三井住友信託銀行 杉戸支店前



昭和40年代同地西側の通り



現在の様子



現在銀行前に移設された碑

MAP No.

12



と いや ば あと

問屋場跡

人馬・宿の手配など重要な役割を担った



問屋場での人足と馬の交代の様子（藤枝宿：人馬継立画／歌川広重）

問屋場は、旅人の荷物の輸送と宿泊場所の調整を行う、重要かつ責任ある役割を担っていました。

主な役職として、問屋（人馬を取り仕切る監督職）と年寄（問屋を補佐する役職）、張付（出納や事柄を帳面に書き付ける役職）、馬差（馬の用立てや運輸の指図する役職）などが詰めていました。

問屋場には、大名や幕府役人、日光門主といった特別な身分の者が通行する際に、先触れという書類が事前

に届きます。ここでまず詳細を把握します。

そして、主より先に宿場に入る家臣が、問屋場にて本陣役や旅籠組合の惣代と宿手配の打ち合わせをします。また、荷を輸送するための人足と馬の調整は、問屋が助郷会所と連絡を取り合い、行いました。

問屋場の跡地には、県の第六区区務所や渡勝商店（P34 参照）、現在の銀行など、まちの重要な施設や店が入れ替り設けられ、今日に至ります。

たいむトリップ

わたかつしょうてん 渡勝商店 跡

問屋場跡地に店を構えた「渡勝商店」は杉戸の有力者・渡辺氏が営む油・砂糖の卸小売業店でした。1959(昭和34)年に氏が土地を提供し、商店協から現国道へ抜ける道が作られ、交通の便が向上します。他に、商工会会長を務めたりなど、まちの発展に力を注いでられました。



レトロな魅力がいっぱいの
看板と当時の店頭

photo: 高橋写真館提供

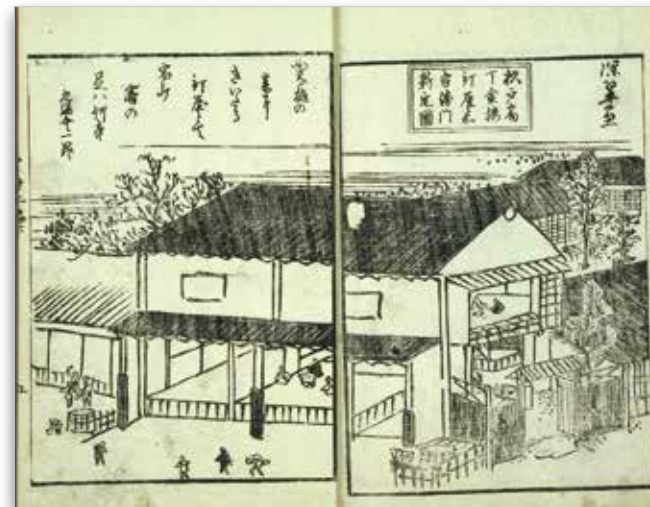
MAP No.

14

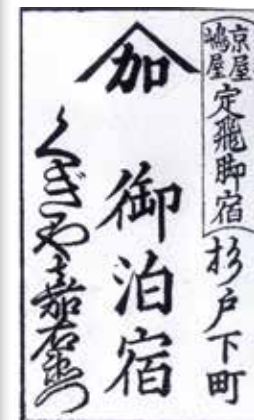


はたごや くぎや あと 旅籠屋 / 釘屋 跡

じっぺんしゃいっく はたごや
十返舎一九が泊まったといわれる旅籠屋



『奥羽一覽道中膝栗毛』に描かれた釘屋



釘屋が載る『諸国道中商人鑑』

下町

MAP No.

13



いな いなりじんじゃ 伊奈稲荷神社

いやはばいなり
問屋場裏の「問屋場稲荷」。働く女衆から深い信仰

Data ▶ 杉戸町杉戸 2-13

伊奈稲荷神社は、かつての杉戸宿問屋場の裏に位置することから、「問屋場稲荷」と呼ばれ地域に根ざしています。神社は、当時の花柳界の人たちから深く信仰されていました。本殿に見られる鰐口に、下町で働く20名の女人衆世話人の名が刻書されていることから、そのことがうかがえます。宿場の真ん中にあり、まさに、身近な神様として、親しまれていたのでしょう。



名の刻まれた「鰐口」



お稲荷さまの祀られる本殿

杉戸宿の旅籠屋のようすを生きいきと今に伝えるのが、十返舎一九による滑稽本『奥羽一覽道中膝栗毛』です。作中には、杉戸宿に実際にあった旅籠屋の釘屋と主の嘉右衛門が出てきます。物語では、延高と筑羅房、弥次郎兵衛、喜多八の一行の、釘屋に泊まった時のようすが描かれています。簡潔にくだりを説明すると次のようになります。“旅籠に着くと桶で足を洗い、奥に通され茶をもらう。主の女房らと話を

した後、弥次郎兵衛は娼妓4人を呼ぶよう頼み、その内のひとり河内屋のお駒を、とも伝える。大酒を飲み、料理は江戸の名店にも引けを取らないほど豪華。”他にも杉戸宿に関わる内容がこの本には書かれています。釘屋や河内屋は実在し、内容もあまりに詳細に描写されていることから、十返舎一九は、実際に杉戸宿の釘屋で過ごしたことがあることと考えられます。

新町

上杉戸から移り
新たな彩りを加えた町場



MAP No.

15
神明神社

しんめいじんじゃ

神明神社

杉戸宿新町の鎮守・神明様

Data

▶杉戸町杉戸 2-12-26



苗字を名乗る寄進者がずらり



神輿庫。天王様に疫病退散を祈願



境内には、白山大権現・天満宮・稲荷神社

神明神社は杉戸宿新町の鎮守で、「神明様」として親しまれています。毎年7月の八坂祭りは「天王様」と呼ばれ、夏祭りで賑わいます。境内には神輿を納める神輿庫があります。石造りの常夜灯が2台ありましたが、現在は土台石のみが残っています。土台石の側面には寄進した氏子の名が彫られています。齋藤作兵衛、渡辺長左衛門のように、寄進者には苗字の表記もみられます。江戸時代の庶民は一般に苗字帯刀は禁止されていました。

しかし、実際には苗字を名乗った者がいたことがわかります。

『風土記稿』には、神明神社については「神明院持ち」とあります。社号「神明神社」と院号「神明院」、祭神「大日靈貴命」と本尊「胎藏界大日」(神仏習合では両者は同一視されている)との関連を考えると、寺院である神明院が別当寺となり、神明神社を管理していたと推測できます。なお、神明院は神社に隣接していましたが、明治の初めに廃寺となっています。

新町

杉戸宿の成り立ちと同じ時代からこの地に



現在の山門をあおぎ見る



時代を感じさせる寺院の景観



柔和なお顔からほほえみが伝わる

新町

Data

- ▶ 香取山東福寺
- ▶ 杉戸町清地 1-9-3

とうふくじ
東福寺は新町にある寺院です。お寺の参道は、かつての杉戸宿と清地村の境となっています。

伝承では、もとは杉戸西域^{かんしやう}の上杉戸^{かんしやう}にあったとされています。1461（寛正2）年と1554（天文22）年には火災を被り、その都度の一色氏による本堂と諸堂の再建があったと伝えられています。現在地には、1615（元和元）年に移ったといわれています。

ただし、『風土記稿』によれば、1623（元和9）年に僧栄慎^{えいしん}が草創し、

1814（文化11）年僧祐教^{ゆうきやう}の系譜が相続したといわれてもいます。

なお、寺院には本尊・不動明王^{ふどうみやうおう}の他、両祖大師^{りやうそだいし}と五大明王^{ごだいみやうおう}、阿弥陀如来^{あみだにょらい}が祀られています。

また、明治期の自由民権運動^{じゆうみんけんうんどう}では、杉戸も運動拠点のひとつだったことから、東福寺でも演説会があり、盛会だったそうです。

1889（明治22）年から施行された市制及町村制で、町役場が東福寺に置かれていたこともありました。

TIME TRIP

た=いむと4つぷ

おおとしふるとねがわ
大落古利根川

大落古利根川は、杉戸町と西隣の宮代町^{みやしろまち}との間に流れる河川です。

名称にある「大落」には、農業排水を落とすという意味があります。



photo：四代目高橋屋提供



遊歩道が整備され、賑わいを見せる古利根川

古利根川の場合は、上流域で利用した用水を一旦悪水^{あくすい}として落とし、下流域で再び用水とする利用方法を表します。

江戸時代初期までは利根川の主流でした。当河川は、古くから洪水で流路を変える「暴れ川」で、流域の人びとは水害に悩まされていました。



古川橋とバス

昭和31年頃。

木造の古川橋を駅方面へ走るボンネットバス。



photo：田沼正之氏 提供

清地村

杉戸宿の東側に広がる

「清き地」として

Data

※ 2022（令和4）年
9月に閉業しました

MAP No.

17



としま や あと せきぐちしき え も ん てい

豊島屋跡／関口式右衛門邸

人びとに愛され続けた由緒のある老舗



- 1) 大震災後も残された納屋などにも風情が
- 2) 納屋のひさしを大木が支える
- 3) 豊嶋屋の屋号紋「カネジウ」が印された瓦
- 4) 代表する銘柄「豊泉」
- 5) 銘柄「杉戸宿」の看板

街道沿い、江戸期を思わせるたたずまいの大きな古民家が豊嶋屋です。近年は屋号を「関口酒造」に改め、創業1822（文政5）年の江戸期から長きにわたり、老舗店として愛されてきました。

14代目店主によると、造り酒屋としては、6代～8代とも伝えられ、代々の家系史では、今川義元の養女で、徳川家康の正室にもなった築山御前が祖先に当たるとのこと。一族は桶狭間の戦いのあと、現在の杉戸町

東端に位置する鷺巣^{わしのす}に移り住んだそうです。

初代がこの地で創業を選んだのは、古利根の恵みと、村名・清地を「清き地」とらえたことが考えられ、明治天皇の東北巡幸の際には、当家の井戸を御前水として飲まれたとのこと。お酒の銘柄は、古くから「豊泉」を主力とし、杉戸にちなんだ宿場ラベルの「杉戸宿」をはじめ「清地村」、「日光街道すぎと七福神」といったお酒が街道沿いの伏見屋にて購入できます。

（P44参照）

清地村



ちかつじんじゃ

近津神社

村を見守る幾多の神様

Data ▶ 杉戸町清地 1-1-29



明るく広々とした境内。

近津神社は清地村の鎮守です。2001（平成13）年に火災被害を受けましたが、2007（平成19）年の再建時に、鎮守の杜も整備され、清々しい境内となっています。

江戸時代、近津神社と関わりのあった寺は、来迎院と至宝院です。来迎院は別当寺として神社を管理し、至宝院は年間祭祀の読経や信者の加持祈禱を行っていました。

顔を背ける
珍しい狛犬

境内には稲荷神社・天神神社・金山神社・厳島神社・浅間神社・三峯神社と数多く神社が祀られています。

また、石祠や石碑といった建造物に至っては枚挙にいとまがありません。その中のひとつに花塚という碑があります。杉戸宿では俳諧が流行していました。それを表すよう碑面には往事のものと思われる作品が刻まれています。

優美な彫刻が施されていた
焼失前の本殿

こうさつば

高札場（復元）

開宿400年の節目に復元された新たなシンボル

Data ▶ 高札場（復元）
▶ 杉戸町清地1丁目2
JA 埼玉みずほ杉戸中央支店駐車場脇



日光道中「宿村大概帳（しゅくむらたいがいちょう）」の資料を元に復元された高札場

杉戸町と町観光協会は、杉戸宿開宿400年の記念に「時を超えた新たなシンボルと、杉戸宿の歴史を体感する場の創造」を目的として、かつて杉戸宿にあった「高札場」を製作・復元しました。

製作には、日本工業大学で特任教授に就いていた波多野氏（当時）が監修を務め、同大学の学生のほか、杉戸町内の大工、企業と連携し、2016（平成28）年に完成されました。

実際に高札場が置かれていた場所は、現時点から500mほど北に向かった「上町」に当たる地点に設置されました（20ページ記載）。

復元された高札場には、過去に記された内容だけでなく、日光街道や杉戸宿についての解説も掲示されており、当時の雰囲気を感じることができます。



ふしみや ふしみやきゅうごろうてい

伏見屋 / 伏見屋久五郎邸

15代までは久五郎として。家系が19代つづく清地の商家



現在の店舗



堅固に木材が組み合わされている蔵

Data

- ▶(株) 伏見屋
- ▶杉戸町清地 1-6-28
- ▶0480-32-0009

倉庫内見学可

※ご見学の際は、店主までお声がけください。



通い徳利に、量り売りの時代を想起



醸造元とのつながりは創業以来



蔵の内部には縦横に走る梁や桁

伏見屋は、伏見屋久五郎創業による商家で、現在酒類販売業を営んでいます。敷地には、当主によれば150年以上経つと考えられる蔵があり、立派に今も役割を果たしています。

商店では、1748(寛延元)年創業の釜屋の名酒「力士」を主力商品として扱っています。

遠方からの客が忘れた財布を取り置き、返した際に濁った酒の再生方法を教わり、これが酒販売のきっかけ、と語り継がれているとのこと。



らいこういん

来迎院

鎌倉時代からの歴史ある寺院



門を抜けて聖なる空間へと踏み入る



縁起にあるご本尊が安置される本堂



不動明王から虚空蔵菩薩。十三の仏様が導き下さる

Data

▶花光山来迎院

▶杉戸町清地 1-6-16
▶0480-32-1339

来迎院は清地村を代表する歴史ある寺院です。

縁起書では、本尊は運慶作と伝わり、奥州藤原氏の守護仏として尊崇されていたとされます。源頼朝に亡ぼされた藤原泰衡の弟・錦戸三郎は、家臣の田村五郎秀時に不動明王を託します。1192(建久3)年に秀時は担願坊幻夢と称し、担願寺を建立しました。戦乱になり寺は焼かれるも、1392(明德3)年に僧日昭が同寺を再興します。1577(天正5)年に僧

宿林が、花光山来迎院担願寺普門坊と称したことで、来迎院となりました。寺院にまつわる話は他にもあります。1691(元禄4)年、村民の母親が眼を患い視力を失ってしまいます。子は21日間寺院を訪れ全快を祈願します。満願の夜、子は夢を見ます。本尊があらわれ、母親の眼を取り、代わりに白い球を入れる夢でした。すると翌朝、母の病は治り、一生眼は不自由しなかったといひます。来迎院が眼病御利益の寺として伝えられる由縁です。

たいむとろっぷ

memo



流灯まつり



photo : 文魁舎印刷所提供

古利根川流灯まつりは、毎年8月上旬に行われる夏祭りです。河川の水面に、畳1枚の大きさを持つ約250基の手製の灯籠が、浮かびます。蛇行にあわせ約1km 灯りが連なり、そのさまはここを震わすほど幻想的です。

流灯まつりの起源「流燈會」



昭和31年頃の清地橋。
江戸時代には
船問屋があった

photo : 田沼正之氏 提供

Data

【古利根川流灯まつり】

- ▶ 8月上旬開催
- ▶ 杉戸町観光協会
- ▶ 杉戸町杉戸 1-10-21
- ▶ 0480-32-3719



華やかな花火と、灯籠の流麗さ



宵闇に浮かぶ灯の美しさに魅せられる

すぎとじゆく な た 杉戸宿の成り立ち

● 杉戸宿年表

杉戸宿は、当初^{かみまち}上町、^{なかまち}中町、^{しもまち}下町の
みでした。その後、新町^{しんまち}（北側の地
区）、河原組、新町の南側が形成さ
れます。最後に横町^{よこまち}、九軒茶屋^{くげんちや}がで
き、宿場構成が定まったといわれて
います。

幕末の宿場は、北側から九軒茶屋、
横町、河原組、上町、中町、下町、
新町と並び、さらに東にある清地村^{せいじむら}
が続き、一体的なまち並みを成して
いたといえます。

近世の宿場町の景観は、街道に沿い
各戸／屋敷の間口が狭く奥行きが広
い、短冊状の地割りが特徴です。間
口の広さで、宿役等が課せられてい
たからです。

杉戸宿では、1645（正保2）年に、
同間口を7間（約12.7m）と定めら
れました。これを基準に、1軒分の
人足と伝馬の負担が決められ、一方
年貢は一万坪が免除されました。

にっこうどうちゅうしゆくそんたいがいちよう 『日光道中宿村大概帳』によると…

- ▶ 宿往還の長さ …… 16町55間（約1.8km）
- ▶ 道 幅 …… 5間（約9.1m）
- ▶ 家 数 …… 365軒
- ▶ 人 数 …… 1,663人
- ▶ 問屋場 …… 1軒
- ▶ 本 陣 …… 1軒
- ▶ 脇本陣 …… 2軒
- ▶ 旅籠屋 …… 46軒

1843（天保14）年 当時

にっこうかいどう 日光街道 と おなりどう 御成道

1800年代			1700年代			1600年代						西暦
1872			1746			1658	1647	1633	1627	1625	1616	西暦
宿駅制度の廃止			名主の人数が十人から 四人へと変わる			横町が成立	御成道への新道が 整備される	新町（南側）が成立	河原組が成立	新町（北側）が成立	杉戸に宿場が置かれる 上町・中町・下町が成立	杉戸
1867	1860	1853	1787	1732	1716	1702	1657	1637	1635	1615	1603	西暦
大政奉還	桜田門外の変	ペリーが浦賀に来航	寛政の改革	享保の大飢饉	享保の改革	赤穂の討ち入り	明暦の大火	島原の乱	武家諸法度	徳川家康が江戸幕府 を開く	大阪夏の陣	日本
1870	1861		1776	1707			1688	1642		1616		西暦
普仏戦争	米・南北戦争		米・独立宣言	大ブリテン王国・成立		英・名誉革命	英・ビュリタン革命			清・成立		世界

日光街道は、江戸幕府が整備した「五街道」の1つです。五街道は、江戸日本橋を起点に各地へ向かいます。日光街道は千住（現足立区）・草加・越谷・粕壁（現春日部市）・杉戸・幸手等21の宿場を経て日光へ至ります。
日光は、もとは関東修験の名山と知られ、その後徳川家康の霊廟東照宮が置かれ、人々が参詣するところとなりました。また、日光街道は宇都宮まで東北の諸大名が江戸と国元との参勤交代に通る奥州街道でもありました。ただし、歴

代将軍による東照宮参拝では、日光街道ではなく日光御成道が使われました。同御成道は中世の「いざ鎌倉」の鎌倉街道中道と一部重複しています。中山道を本郷追分から分岐し、岩淵（現北区）・川口・鳩ヶ谷（現川口市）・大門（現さいたま市）・岩槻（現さいたま市）を進み、幸手にて日光街道に合流します。江戸と幸手の間の行路を、同御成道としたのは、城のある岩槻にする必要があったためとされています。



「杉戸宿まち歩き ポケットブック」制作

【編 集】

- 初版・第2版
特定非営利活動法人日本社会福祉事業協会
「まち歩きブック」チーム
- 第3版 改訂
mARu design room

【協力】

杉戸宿案内人の会
すぎとの魅力を愛する皆さま

杉戸町マスコットキャラクター
「すぎびょん」



【発 行】

平成27年3月 初版発行
平成28年3月 第2版発行
令和4年12月 第3版発行

●杉戸町役場
〒345-8502 埼玉県北葛飾郡杉戸町清地 2-9-29
TEL: 0480-33-1111
HP: <http://www.town.sugito.lg.jp>

●杉戸町観光協会
〒345-0036 埼玉県北葛飾郡杉戸町杉戸 1-10-21
TEL: 0480-32-3719
HP: <https://www.kankou-sugito.jp/>